

アグリカレッジ福島 - アグリ探求棟・屋外作業準備棟・一般宿泊棟・学生寮 -
新時代のリーダーを生み出すクリエイティブ・プラットフォーム



学生や研修生の交流の場となるコミュニティテラス

福島県内唯一の農業高等教育機関である農業短期大学の寮施設の建替えとスマート農業に対応した研修ホールの新築計画。

男女寮と外部研修者のための一般宿泊棟、屋外作業のための準備棟、スマート農業の研修ホールなどのプログラムを9つのボリュームに分割し、建築の軒先と各棟へのびる渡り廊下が既存校舎から連続する

ネットワークとして敷地全体を有機的につなぐ。

寮と一般宿泊棟は、福島の伝統的な前沢曲家集落のような L字型の屋根が連なる風景を連想させる要素を含みながら、ドマとヒロマ、エンガワによってアクティビティを誘発し、ホール棟と屋外作業準備棟は、周辺環境に呼応するように変形しながら形づくられた六角形平面のホールを中心に、学生や訪れた人々の学びの場として、段差や柱、家具を手がかりに広がる FLA (Flexible Learning Area) が多様な活用を受け入れる空間となる。



アグリ探求棟クリエイティブ大ホール



渡り廊下(ミチ)を繋ぐ結束点(ツジ)

【DATA】所在地: 福島県矢吹町 / 用途: 専修学校(農業短期大学・研修施設・寄宿舍) / 構造: 木造 / 規模: 地上1階、一部2階 / 敷地面積 397940㎡(キャンパス全体) / 建築面積: 4180㎡ / 延床面積: 約4449㎡ / 共同設計: 辺見設計 / 竣工: 2025年1月 / PHOTO: ToLoLo studio

SENDAGAYA TERRACE



クレバスのように切り開いた外部階段

千駄ヶ谷の住宅街、路地の奥に位置し、道路とは 2mしか接道しておらず、東・西・南ともに隣接する建物に囲まれた敷地。北側隣地と3mほどの高低差があり、敷地の四周は日影制限のかからない10mの建物の壁と擁壁に囲まれており、都市の中の経済や法規制が生み出した地面の中の環境と言っても過言ではない。地下に穴を掘るがごとく、地面から下りる階段と各室までのアプローチを確保し、空から降り注ぐ光や、流れる風を捕まえるように、隣地との隙間を空ける。

外部階段やアプローチは、わずかに接続した路地から連続し人の営みが表出するようなテラス(土間)空間に、光や風が通り抜ける。現代の資本主義経済が生み出した台地に、風通しのよい人間のための空間を獲得しようとした試みである。

【DATA】所在地: 東京都渋谷区千駄ヶ谷 / 用途: オフィス、長屋 / 構造: RC造 / 規模: 地上3階 / 敷地面積: 187.70㎡ / 建築面積: 125.61㎡ / 延床面積: 310.02㎡ / 竣工: 2025年3月 / 写真: 西川公朗

T-PLUS 日本橋小伝馬町

「ファサードデザイン監修業務」としてファサードを含めた"窓際領域"から今後あるべきオフィス環境を構想することに注力した。

構成要素は主に2つ。外壁より外部側に設置される"アウターユニット"と、室内側に設置される"インナーユニット"である。"アウターユニット"は周辺環境と室内環境を調停する様々な機能を持ち、その設置位置は周辺の建物からの視線や風・光環境など



"アウターユニット"には緑化ポッドや視覚遮蔽パネルなどを設置

の諸条件から決定された。"インナーユニット"は、執務をサポートする機能を持つユニットであり、窓際空間を豊かなオフィススペースとして転化させることを目的とした。こうして敷地の条件(アウターユニット)と、そこで過ごす人々の活動(インナーユニット)が重なり合う風景が"ここにしかない風景"として立ち現れる。

【DATA】所在地: 東京都渋谷区千駄ヶ谷 / 用途: オフィス、長屋 / 構造: RC造 / 規模: 地上3階 / 敷地面積: 187.70㎡ / 建築面積: 125.61㎡ / 延床面積: 310.02㎡ / 竣工: 2025年3月 / 写真: 西川公朗

土生公民館

分節した屋根とボリュームによる集いの場

村上海賊の歴史や造船の町で知られる因島は、少子高齢化が進む。老朽化している公民館を移転するため、旧土生小学校跡地に新しい施設を建てるプロジェクトが2018年に始まった。

ボリュームと屋根を町の民家に寄り添うスケールに分節させながらも、それらが寄り集まったような形態とし、それぞれに町並みからサンプリングした素材を用いることで、高低差の中に民家サイズに

分けたそれぞれのボリュームは、廊下や部屋という境界を持ちながらも、それらをできるだけ曖昧なものにしようと試みた。時にははっきりと分かれ、時にはゆるやかに繋がり、必要に応じて広さを変え、テラスと一体になって外になったり、伸び縮みしたりする。屋根が重なり合いながら見え隠れする、土生の風景に溶け込むような建築を目指した。

大・中・小ホールが一体となり、350席が収容できる1つの大きなホールとなり、全て閉じると大きさが異なる



周辺の民家に溶け込むように重なり合う分節した屋根



小ホールから望む中・大ホール



賑わいを生む縁側テラス

4つの部屋を同時に使用することもできる。

建物を敷地中心に再配置し、多角形のホールを中心に角度をもって配置された各ボリュームが街角や広場に向かってそれぞれの方向に顔を出し、温かみのある木の屋根が人々を迎え入れる。その屋根下の縁側空間は、目的的に訪れる人々だけでなく、グラウンドや多目的広場で遊ぶ子供たち、体育館利用者や縁側で井戸端会議をする人々など、あらゆる世代にとっての拠り所となる。コロナ禍、「人との関わり方」に戸惑いながら生活する日々を過ごしたからこそ大切だとわかった、縁側に座っておしゃべりを楽しむようなささやかな日常を支える場として、人々の生活に溶け込む集いの場となることを願っている。

【DATA】所在地：東京都渋谷区千駄ヶ谷 / 用途：オフィス、長屋 / 構造：RC造 / 規模：地上3階 / 敷地面積：187.70㎡ / 建築面積：125.61㎡ / 延床面積：310.02㎡ / 竣工：2025年3月 / 写真：西川公朗